

新日窒、水俣病原因で反論

旧軍が沈めた爆薬？

毒物が流れている

水銀説
ここだけとは奇妙

新日窒の吉岡喜二社長と千原夫事務は七日熊本県庁に幸本知事と岩尾瀬議長を訪問、水俣病の水銀説に反論するとともに、その原因は、旧軍隊が水俣湾に捨てた爆薬ではないかと説明、また会社側で今月中にも軍需物資の海上調査をやり、場合によっては湾内の掃海もするとのべて了解を求めた。この「軍需物資説」は日本化学工業協会の示唆にもとづくものだが、六日厚生省の食品衛生調査会で水銀説がかなり強く主張されただけに、会社側の今後の調査が注目される。

この日吉岡社長は西田工場長、一時から約三十分間知事と会い、このあと議長室を訪ね、午前十一時

議長、田中水俣病対策特別委員長らに会った。

この会談のさい吉岡社長は有機水銀説に納得できない理由として五点を挙げ、むしろ旧軍隊が海に捨てた軍需物資が病気の原因として疑われるので調査したいとのべた。



左から西田工場長、吉岡社長、千原事務(県会議長室で)

水銀説に反論した五点は、さきの水俣病対策特別委員会で西田工場長のべたものと内容は同じで、昭和二十九年以降、しかも水俣に限って水銀が病気の原因になった点を根拠大は説明していない。●水俣湾内の魚介類が有毒化する経路と機構について実験的証明がない●死病猫の臓器中の水銀含有量の差が有機水銀説の一つの根拠になっているが、会社側の実験ではそのような差は認められないなどというものである。

これにかわって軍需物資説をもち

出したのは日本化学工業協会大島竹治理事(協会技術部長)の現地調査報告にもとづくもの。大島理事は同協会から派遣されて九月九日から同月十四日まで現地を調査し、このほど中間報告を同協会に提出している。

報告書の中かで同理事は会社側とほぼ同じ理由で水銀説を強く否定し、今後とらるべき原因究明方法の一

つとして、戦時中水俣地区にあった旧軍隊の軍需品集積所を調査すべきことを挙げている。同理事が軍需物資、とくに爆弾に疑いの目を向けたのはつぎのような理由からである。

- ①こんどの調査で水俣、八代湾一帯には戦時中海軍特攻隊、陸軍砲隊の基地があった。●罹病者が最も多く発生した月の浦、湯島に近い水俣湾南側の茂道は軍需物資の集積所だった。
- ピクリン酸ヘキソール、四エチル鉛などを主原料とする爆弾が終戦後水俣湾の深いところに捨てられた。●数年を経て爆体が腐蝕し、なかの薬物が海中に流れだした。これが三十二年ごろである。

つまり大島理事の「軍需物資説」も現在の段階では一種の「推理」であり、今後の調査が問題というわけ。報告書の中かで同理事は「茂道の隊長が同地にいるにもか

かわらず、軍需物資をどう処理したかは一切知らず、手がかりはえられなかった」とものべている。しかし会社側ではこの推理にもとづいて軍需物資の調査に乗り出すわけで、会社ではまず爆弾がどこに捨てられたかを調査、ついで海上からレーダーで爆弾のあり場所を探し、それが確認されたら爆大にも協力を求めて内容物で動物実験をする段取りである。海上調査は今月中にも実施するが、吉岡社長は「水俣湾の南西入口、茂道と赤路島の間が疑われる」とみている。

なお岩尾瀬議長との会談のさい田中水俣病対策特別委員長と荒木同委員は「軍需物資調査は第三者からみれば会社側の責任回避策ともみられる」として爆大とも今後よく協同するよう要望した。